〈講演〉

中世シチリアにおける異文化の併存と対立

―ヨーロッパ、イスラム、ビザンツ―

高山博

〈章立て〉

はじめに
私の研究テーマ
中世シチリア
Ⅰパレルモの遺跡
サン・カタルド教会／サン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会／サン・ジョヴァンニ・デイ・レブロージ教会／ルッジェーロの間／カッペッラ・パラティナ／モンレアーレ大聖堂／マルトラーナ教会
Ⅱノルマン・シチリア王国の成り立ちと歴史家の関心
1ノルマン人とヴァイキング
2ノルマン人の南イタリア征服の要因
3歴史家の関心
Ⅲ王国内の多言語・多文化並存
1多言語の遺物
2人々の分布
3パレルモのイスラム教徒たち
Ⅳ宮廷の異邦人、異教徒たち
1王妃たち
2王宮のイスラム教徒たち
3宰相
4王国最高顧問団
5王宮の知識人たち
Ⅴ一二世紀ルネサンスとシチリア
1ハスキンズ
2王国での翻訳活動
3文化移転
4異文化接触の産物
5異文化共存が可能だった理由
おわりに

講演内容に入る前に、私の研究領域、研究テーマを簡単に紹介させていただこうと思います。研究領域としては、西洋中世史、地中海史、比較史ということになるかと思います。研究テーマとしては、西洋中世における統治システムの比較研究、国家の比較研究、中世地中海の三大文化圏の比較研究、ノルマン・シチリア王国の研究、異文化交流研究、異文化接触論、グローバル化研究を挙げることができます。これらの中で、大学の学部三年生の時から現在に至るまで、ほぼ四〇年に渡って常に私の研究の中心を占めてきたのは、ノルマン・シチリア王国です。

この講演では、このノルマン・シチリア王国についてお話しいたします。お配りしたレジュメをご覧ください。今日はこのレジュメに従って王国の異文化交流の実態をお話していきたいと思います。レジュメの下の方から二ページ目にかけて、私がこれまで欧文で発表してきた中世シチリアに関する著作を挙げておきました。これをご覧いただければ、私がこれまで取り組んできた、より専門的な研究テーマがおわかりいただけるんじゃないかと思います。今日の話の中には、これらの研究成果も含まれております。

最初に、「現代世界はシチリア化している」という言葉を紹介したいと思います。これは、あるイタリアの作家が使った言葉で、言語・宗教・文化を異にする人々が、日常的に接するようになってきた現代世界の状況をシチリアに例えたものです。このような現代世界の状況は、現代のシチリアよりも、むしろ異文化に属する人々との共存によって栄えた中世のシチリアに当てはまるんじゃないかと思います。特に一二世紀シチリアのノルマン王国では、イスラム教徒のアラブ人、ギリシャ正教徒のギリシャ人、ローマ・カトリック教徒のラテン系の人々が共存して、当時のヨーロッパ随一の経済的、文化的繁栄を享受しておりました。現代世界では、この中世シチリアで生じていた異文化接触、交流が日常的に行われるようになってきています。しかも、この現象は一国にとどまらず世界的な規模で進行しています。

近年、多くの人がシチリアに強い関心をもつようになってきました。テレビや雑誌では、頻繁にシチリア特集が組まれ、ノルマン期の遺跡には日本人観光客が大挙して訪れるということもあります。シチリア関連の本も次々と出版されています。今から四〇年前、私がシチリアの研究を始めたころには、とても考えられなかったことです。

では、今日の話の内容をご覧ください。中世シチリアについて五つに分けてお話していくつもりです。最初に、「パレルモの遺跡」。イタリアのシチリア州の州都パレルモにある遺跡を皆さんに紹介したいと思います。その次に、一二世紀のシチリアにできたノルマン王国。このノルマン・シチリア王国の成り立ちと、この王国に関する歴史家たちの関心、彼らがシチリアのどういったところに惹かれてきたのかを、お話しいたします。それから三つ目に、このノルマン・シチリア王国の異文化接触。王国内の多言語、多文化状況を具体的にお話しようと思います。それから、四つ目ですが、ノルマン王の宮廷に焦点を当て、宮廷にどのような人たちがいたのかを具体的にお話しいたします。そして、最後に、「一二世紀ルネサンスと

シチリア」。「一二世紀ルネサンス」という言葉をご存じの方もいらっしゃると思いますが、一二世紀のヨーロッパで大規模な文化活動が生じていたという議論です。この文化活動の中で非常に重要な位置を占めていたのがシチリアです。この一二世紀ルネサンス論とシチリアとの関係を、お話しするつもりです。

では、「パレルモの遺跡」を見ていきましょう。この写真は、サン・カタルド教会です。パレルモは、シチリア島の西北端に位置していますが、ノルマン・シチリア王国の首都でした。このパレルモにある王宮が王国の中心だったと言っていいのではないかと思います。王国時代の遺跡のほとんどが、このパレルモの中心部の旧市街にあります。現在のパレルモは当時よりもはるかに大きくなっていますが、その真ん中の旧市街にノルマン時代の遺跡が残っています。旧市街には迷路のような小道がいくつもあります。そのような小道を抜けると突然目の前にノルマン期の建物が現れる、そういった経験をされるかもしれません。写真をご覧ください。四角い建物の上に三つの赤い丸屋根が載っています。このように四角い建物の上に赤い丸屋根が載った建物はアラブ・ノルマン様式の建物と呼ばれています。赤い丸屋根を持つ建物が、傍らに植えられたシュロの木と合わさって、強い異国情緒を醸し出しています。このサン・カタルド教会は初代の王ロゲリウス二世の宰相だったマイオによって建てられました。マイオが暗殺されましたので、その内部装飾は未完成のままです。ただ、当時のモザイクが今も残っていますし、建物の外観はこのように非常に印象的です。

次は、パレルモの旧市街にあるサン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会です。これはサン・カタルド教会の南西方向にある教会です。こちらのほうは赤い丸い屋根がご覧のとおり五つ並んでいます。この教会は初代の王ロゲリウス二世によって建てられました。この教会跡には、今でもイスラム風庭園が残っています。シュロの木や柑橘系の植物が往時の情景を偲ばせてくれます。

次は、サン・ジョヴァンニ・デイ・レブロージ教会。これは旧市街からだいぶ離れたところにある教会です。これも赤い屋根を持ったノルマン時代の建物で、アラブ・ノルマン様式の典型といわれている建物の一つです。ここはかつてハンセン氏病の病院として用いられていましたのでこのような名前で呼ばれているわけです。ここも、教会の傍らに植えられたシュロの木が、赤い丸屋根と合わさって強い異国情緒を醸し出しています。

南国の植物に囲まれたこういった建物を見ておりますと、ここは本当にヨーロッパなんだろうかと不思議な気分になります。北のイタリア諸都市とは全く雰囲気が違っています。むしろ、イスラム文化圏に属する北アフリカのモロッコや、スペイン南部のグラナダ、あるいはコルドバに近いんじゃないかという気がします。ただ、今お見せした建物はイスラム教徒たちがこのパレルモを支配していた時代のものではありません。そうではなくて、彼らの後の支配者、ノルマン人の支配の時代に造られたものです。現在、アラブ人たちの遺跡はほとんど残っていませんけれど、ノルマン期に造られた数々の遺跡がイスラム文化の影響を色濃く漂わせているというわけです。

さて次は、ノルマン王宮の中の一室、ルッジェーロの間です。ノ

ルマン王宮は先ほどお見せしたサン・ジョヴァンニ・デリ・エレミティ教会の隣にありますが、そのノルマン王宮の中のルッジェーロの間と呼ばれている部屋です。ここには非常に美しいモザイクで飾られた壁があります。この部屋の壁面を飾るモザイク画は、私たちに当時の、中世の華やかだった王宮の様子を垣間見せてくれます。ここには、金色を背景に、緑鮮やかな木々、人物像、動物像が描かれています。これは南側の壁ですが、上段には中央にヤシの木が描かれ、その左右に半馬人と植物が描かれています。下段のほうも真ん中の一本の木に向き合うように孔雀とヒョウが対照的に描かれています。このモザイク画は、狩猟をテーマとしていると考えられています。これは東側の壁面です。上段はヤシやシュロのように見える木々の間で、犬を従えて狩人が弓をいっぱいに引き絞ってシカを狙っています。これも左右対照です。下段には、ライオンが向き合った形で描かれています。それから、これは西側の壁面ですが、これもやはり狩人が弓を引き絞ってシカを狙っている左右対照の絵です。こちらの下段には孔雀が描かれています。では、次に天井をご覧ください。同じルッジェーロの間の天井です。帯に見える文様が描かれていますが、その中にワシ、ウサギ、ライオン、そして想像上の動物グリフィンが描かれています。このモザイクは、砂漠の楽園オアシスを喚起させるイスラム風のモチーフですが、技術的にはビザンツの影響を受けたものだと考えられています。

　これは、同じノルマン王宮の中にある王宮礼拝堂です。イタリア語ではカッペッラ・パラティナと呼ばれています。ここにはキリスト教の雰囲気が強く漂っています。このモザイクも基本は金色で、金色の中に青や緑、赤の色が使われています。これは正面の祭壇の写真です。これは正面の祭壇の天井、これをよく見ると文字が見えます。ラテン語とギリシャ語です。この王宮礼拝堂は一度ＮＨＫの番組で使ったことがありますが、生放送の最中に突然話を引き伸ばすよう指示されて、急遽このラテン語の解読を始めることにした思い出深い場所です。こちらの写真は、信者席の隣の側廊の天井です。よく見ると、アラビア語が記されています。横のほうにはペルシャ風の宴会の絵が描かれています。

　それから次は、パレルモ近くの小高い丘の上にあるモンレアーレという町の大聖堂です。このモンレアーレ大聖堂の壁面にも非常にきれいなモザイク画が描かれています。この大聖堂は一二世紀後半に造られたものですが、当時のモザイクが現在も残っています。この中央の空間は、幅が四〇メートル、長さが一〇〇メートルほどあります。非常に大きな空間です。朝早くくれば、日光が差し込んで壁面のモザイクがキラキラ輝くのを見ることができます。この写真は、その壁に描かれている聖書の場面です。天地創造、ノアの箱舟など、旧約聖書の場面が描かれています。この写真は、正面の祭壇の左側にモザイクで描かれたキリストの半身像です。

　もう少し観光を続けましょう。これは一番最初にお見せした旧市街のサン・カタルド教会の隣にあるマルトラーナ教会の中のモザイク画です。サン・カタルド教会の外観の美しさに比べてマルトラーナ教会はあまり目立ちませんが、内部には美しいモザイク画があります。入口を入ってすぐ左側には、聖母マリアにひざまずくゲオルギオスのモザイク画が飾られています。ゲオルギオスは初代の王ロ

ゲリウス二世の宰相で、このマルトラーナ教会を造った人物です。右側には、ロゲリウス二世がキリストから直接王冠を受けているモザイク画が飾られています。こちらの写真はマルトラーナ教会の天井のモザイク画、それから柱と天井につながっている部分のモザイク画です。この教会には、ビザンツ帝国で歌われていた讃美歌がギリシャ文字ではなく、アラビア文字で記されている柱もあります。

パレルモにあるこのようなノルマン期の遺跡や遺物は、私たちの好奇心を強く刺激します。遺跡や建物自体が持つ美しさがその理由の一つであることは間違いありませんが、美しい歴史的遺産はパレルモ以外の場所にも数多く残っています。バチカンの巨大な歴史的遺産を挙げるまでもなく、ヨーロッパ各地には数多くの美しい歴史的な遺物が残っていますし、教会の華麗なステンドグラスに心を奪われた人も多いのではないかと思います。このパレルモの遺跡が私たちの好奇心を刺激するのは、このシチリア島にヨーロッパ文化とは異なる文化が栄えていたからではないかという気がします。地中海中央の島にノルマン人の王国が建設されたというだけでも十分な意外性を持っていますが、それに加えてここで目にする遺跡や遺物は、私たちが知っているヨーロッパのものとはかなり違っています。そこには、アラブやビザンツの雰囲気が色濃く漂っています。ヨーロッパ文明の中心の一つであるイタリアに、どうしてこのような文化が栄えていたのか。そういう疑問が私たちの心をとらえてしまうからではないかと思います。

では、この異国情緒豊かな遺跡を残したノルマン・シチリア王国はどのようにして生まれたのでしょうか。ノルマン人と言えば、船に乗って略奪を行ったバイキングのイメージを思い浮かべる人も多いのではないかと思います。実際ノルマン人とバイキングは、しばしば同じ意味で用いられており、ノルマン人による南イタリアの征服活動、王国建設も北欧バイキングの活動の一部として語られることがあります。しかしながら、次の点に注意していただきたいと思います。つまり、九世紀前後にユトランド半島、スカンジナビア半島からヨーロッパを荒らし回ったバイキングの活動と、一一世紀にイングランドや南イタリアの征服を行ったノルマンディー出身のノルマン人たちの活動は全く違う時代のものだということです。また両者は同じノルマン人、ノースマンですね、北の人を意味する北方ゲルマン人の一部と考えられてはいますけれど、性格がかなり違います。ここで、私たちが扱っているのは一一世紀のノルマンディー出身者たちです。

ユトランド半島やスカンジナビア半島に住む人々の中には交易を生業とする者たちもいましたけれど、九世紀前後に繰り返された彼らの激しい西ヨーロッパ襲撃、略奪が船に乗って略奪・虐殺を行う海賊というバイキングのイメージを作り上げました。実際、彼らの激しい襲撃の影響は、西ヨーロッパ社会の性格を変えるほどに大きなものでした。それによってカロリング朝フランク王権の衰退に拍車がかかり、小領主や城主が割拠する戦乱の世の到来が促されました。一〇世紀の初めに人々を恐怖のどん底に陥れた、そのバイキングの一部はノルマンディーに定住して、ノルマンディー公国をつくりました。このころに、そのバイキングたちの襲撃・略奪の活動も下火となっていきます。

一一世紀に南イタリアを征服したノルマン人は、このノルマンディー公国出身のノルマン人です。したがって、その祖先がバイキングだった可能性はありますが、彼らの家系をたどることはできませんので、断言することもできません。ノルマンディー公国出身のノルマン人たちは、イングランドと南イタリアを一一世紀後半のほぼ同じ時期に征服しますが、両者は全く異なる性格のものでした。イングランド征服は、ヘイスティングズの戦いという一度の戦闘で決した文字通りの征服でした。南イタリアの征服は、ノルマン人たちが南イタリアの覇権争いに巻き込まれて次第に勢力を拡張していく、長く緩やかな過程です。その期間は、ほぼ一〇〇年にわたっております。南イタリアのノルマン人たちは、最初は様々な雇い主のために働く傭兵に過ぎませんでしたけれど、やがてノルマン人指導者の下に自分たちの国をつくり、南イタリアを統一していきます。

ノルマン人が南イタリアにやってきた理由は、簡単に申し上げますと次の二つです。一つは、当時一一世紀のヨーロッパの巡礼熱。ノルマンディーからもエルサレム巡礼に出掛ける人が大勢いましたが、その途中で南イタリアを経由しています。もう一つは、ノルマンディーの領主の次男、三男が領地を相続できなかったために、外に出て行くしかなかったということです。その領地獲得のチャンスを与えてくれる場所の一つが、この南イタリア、シチリアでした。

当時のシチリア島は、イスラム教徒が支配していました。カラブリアとアプーリア（プーリア）はビザンツ帝国領でした。そしてカンパーニャ周辺にはランゴバルド系の国々と、ビザンツ帝国の影響下にある都市国家がありました。このような国々が、お互いに争っていて、優秀な傭兵を求めていました。それにノルマンディー出身の騎士たちが当てはまるわけです。ノルマン人たちは、最初傭兵として南イタリアにやってきますが、やがて領地を獲得する者たちがでてきます。そしてその中の一人がシチリア伯となり、そのシチリア伯の息子がシチリア王国をつくることになります。

ノルマン・シチリア王国が生まれた経緯は、以上のように説明できますが、王国の特徴を理解するためには、当時の地中海がどういう状況にあったかを確認しておく必要があります。この地図を見ていただければ、一目瞭然ですが、三つの文化圏、つまり、アラブ・イスラム文化圏、ビザンツ・ギリシャ文化圏、ラテン・ヨーロッパ文化圏という三つの文化圏が、ちょうどこのシチリア王国ができたところで交わっており、この境界部分が征服・統合されてノルマン・シチリア王国が誕生したということなのです。そのために、このシチリア王国の中に、三つの異なる文化が併存するという状況が生じました。

ここで、歴史家たちがこの王国をどのように見てきたかを、お話しておきたいと思います。歴史家たち、つまり、この王国を研究した歴史家たちは、なぜこの王国に惹かれたのか。まず第一は、冒険物語です。ノルマン人によって建国されたシチリア王国は、長い間、中世の冒険物語の一部として語られておりました。実際、傭兵として北からやってきた無一文のノルマン人が、どうやって領地を獲得しアプーリア公やシチリア伯になったのか、シチリア伯の息子はどのようにして王位を獲得したのかは、すでに中世の時代から多くの人々の関心を引き、いろいろな年代記に記されております。現代で

も、そういった冒険物語として、王国に関する書物が書かれることがあります。つまり、冒険物語としてのノルマン人の活動への関心が、中世から現在に至るまで生き続けており、それが中世シチリアを研究する動機の一つになっているということです。また、先ほどお見せしたモザイク画や赤い丸屋根を持つ建物に象徴される異国趣味、これが多くの研究者たちの好奇心を刺激してまいりました。先ほどお見せしたイスラム風の教会ですね、こういったものが多くの研究者たちの好奇心を刺激したということです。

そして、二〇世紀になりますと、歴史家の間ではこの中世シチリアがヨーロッパにとって二つの意味で非常に重要だったと認識されるようになりました。一つは、このシチリアを通って、当時の先進的な文化、つまりアラブ・イスラム文化とギリシャ・ビザンツ文化がヨーロッパに入っていったということです。このシチリアでは、プラトンやアリストテレスの著作をはじめとして、多くのギリシャ語、アラビア語の書物がラテン語に翻訳され、ヨーロッパに導入されました。それを元に、ヨーロッパ文明の基礎ができたと考えられています。このように、ヨーロッパにとってシチリアは先進的な東方文化を取り入れる場として、非常に重要だったと考えられてきたわけです。

ヨーロッパにとって重要だと考えられているもう一つの理由は、近代国家組織の原型となるようなものが、このシチリアで作られたという議論です。ヨーロッパの歴史学を発展させてきた原動力は、自分たちの国がどうやってできたかという過去への探究心でした。これが一九世紀のヨーロッパ歴史学を飛躍的に発展させました。この時代、歴史家たちは、フランスはどうやってできたのか、ドイツはどうやってできたのか、イギリスはどうやってできたのか、さらには、この一九世紀に世界をリードしているヨーロッパ近代国家の源はどこにあるのか、という問題意識を持っておりました。一九世紀の歴史家たちは、国の歴史の中心に国王や国王の行政組織を据え、その近代的な要素が一体どこから始まったのかという点に関心を集中させていました。そして、時代をさかのぼって一二世紀、一三世紀のイギリスやフランス、そしてシチリアにたどり着いたということです。

このように歴史家たちは、一方ではこのシチリア王国をヨーロッパ世界の辺境とみなし、ヨーロッパが東方文化を取り入れる窓口として位置付けてきました。イスラム世界やビザンツ世界のギリシャ語やアラビア語の著作が、この王国でラテン語に翻訳され、ヨーロッパに紹介されていったからです。しかし、他方では、このシチリア王国が高度に官僚化した行政制度を持ち、ヨーロッパの近代的行政制度の先駆けとなったと考えてきました。

この二つの見方はいずれもヨーロッパ史にとっての王国の意味を求めたものです。しかし、私にとって、この王国が重要なのは、ラテン、ギリシャ、イスラム文化が併存していたという点です。ここでは、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語が公用語として用いられており、それらの言語で書かれた文書が、現在も残っています。中世のシチリアはヨーロッパの歴史家たちにとってはヨーロッパの辺境に過ぎませんでしたけれど、私にとっては三つの文化圏や文化を比較し、三つの文化の接触・交流を研究できる絶好の場所だったと

いうことです。

では、この王国の具体的な状況を見ていきたいと思います。まだ私が学生だったころの話ですけれど、パレルモの町中にある国立ギャラリーを訪れる機会がありました。そのとき、この国立ギャラリーの中庭や土間には、王国の多言語・多文化併存状態を示す遺物が無造作に置かれておりました。雨ざらしの中庭に横たわる巨大な柱にはコーランの章句がアラビア語で刻まれておりました。同じギャラリー内の薄暗い一室には様々な石板が砂ぼこりをかぶったまま保管されていました。その中には異なる文字を二種類、あるいは三、四種類同時に含む石板もありました。この写真もその一つです。現在、この石板はジーザ宮に展示されていますが、そこに移される前は国立ギャラリーの薄暗い部屋の中にありました。この石板の表面には、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ文字のアラビア語で、ほぼ同じ内容のことがらが刻まれています。

そのラテン語の部分だけ紹介しますが、直訳するとこうなります。「九月のカレンダエの一三日（ローマ暦ですから、九月のカレンダエ（初日）の一三日（前）というのは八月二〇日に当たります）、グリサンドゥスの母であるアンナが他界し、聖マリア大教会に埋葬された。一一四八年、インディクティオー暦一一年のことである。そして、六月のカレンダエの一三日、彼女の息子が主と自分自身のために建てたこの礼拝堂に移された。一一四九年、インディクティオー暦一二年のことである。」

では、次の写真をご覧ください。これは私が頻繁に使っている史料です。シチリアのパレルモやカタニアなどの古文書館、あるいはスペインの古文書館に、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語、あるいはそれら複数の言語で書かれた一一世紀、一二世紀の羊皮紙文書が保管されています。これは、一〇九五年に作られた羊皮紙文書です。ギリシャ語の序文と跋文があり、その間にアラビア語による住民の名前のリストが挟まっています。

この写真は、そのギリシャ語の跋文の部分です。これを直訳すると次のようになります。「このプラテイアは（プラテイアは名簿と言ってもいいですが、ここでは文書と考えたほうが通りがいいかと思います）、予、ロゲリウス伯の命により、世界紀元六六〇三年、インディクティオー暦三年にメッシーナにおいて記された。しかるに、予の土地および予の封臣たちの別のプラテイアがいくつか、世界紀元六六〇一年にマザーラで記されていた。それゆえ、次のことを命ずる。すなわち、もしカターニア司教に譲渡される、このプラテイアの中に記されているサラセン人たちの内の誰かが、予のプラテイアや、予の封臣たちのプラテイアの中に見いだされたならば、その者は例外なく直ちに返却されなければならない」というものです。この史料についての話を始めると時間が足りなくなりますので、関心のある方は私の論文をご覧いただければと思います。

こちらの写真は、一一四五年に作られた羊皮紙文書で、今お見せした一〇九五年の文書を改訂したものです。こちらの方は冒頭部分が紛失しておりまして、冒頭部分の内容はわかりません。名簿がギリシャ語とアラビア語で併記されており、跋文はアラビア語です。冒頭は多分アラビア語だっただろうと推測されます。この二つの羊皮紙文書を比較するだけでも結構面白い点が浮かび上がってきます。

最初の文書は最初と最後がギリシャ語で真ん中がアラビア語だったのに、なぜ後の文書は最初と最後がアラビア語で真ん中がアラビア語とギリシャ語になっているのか。この違いは、当時の文書行政や書記の変化を示唆しているのですが、ここでは深入りしないことにします。このような多言語の文書が残っているという点がこの王国の特徴の一つです。

さて、この王国では、アラブ・イスラム文化、ギリシャ・東方正教文化、ラテン・カトリック文化を背景に持つ人々が併存して生活していました。しかし、これらの異なる文化集団に属する人々は、王国内に混住していたわけではありません。モザイク状に住み分けておりました。モザイク状に住み分けるといってもいくつかのレベルがありますが、大きくとると、シチリア島の南部、中央部、西部には多くのアラブ人が住んでいて、北東部にはギリシャ人とアラブ人が住んでいました。カラブリアの住民の多くはギリシャ人、それより北の住民の大部分は南イタリア人でした。

他方、世俗の領主たちのほとんどはラテン系、とりわけノルマン人、大所領を有する教会や修道院の聖職者たちの多くもラテン系でした。しかし、王に仕える役人たちは、アラブ人、ギリシャ人、ラテン系のすべてを含んでいました。そして、農民の多くはシチリア島ではアラブ人とギリシャ人、イタリア半島部ではギリシャ人か南イタリア人でした。王国内に異なる文化的背景をもつ人々が併存していたのは、この南イタリアが先ほど申し上げましたように、ちょうど異なる文化圏の境界部に位置していて、それぞれの文化圏に属していた国々をノルマン人が統合して一つの王国をつくり上げた結果です。そのために、王国の住民構成や地方役人の構成に大きな地域的偏差が生じました。また、首都がパレルモに置かれたことによって、多くのアラブ人が王宮で働くようになりました。しかし、異なる文化の担い手たちは、自らの属する文化と他の文化を融合させることなく、各々の住み分け領域を守り続けておりました。この異なる文化の担い手たちは、その多くがこの地で生まれ育った者たちですが、遠い異国の地からやってきた者たちもおります。彼らがこの地を訪れたのは、この王国が地中海交易の中継点だったと同時に、王国内に併存していた言語、文化集団が隣接する大文化圏との交流を容易にしていたからです。

では、ここから、シチリア王国のより具体的な話に移りたいと思います。一二世紀の末にこのシチリア島を訪れたスペインの旅行者イブン・ジュバイルが、王国に住むイスラム教徒について、非常に興味深い情報を残してくれています。彼はメッカ巡礼をして、その帰りの船がシチリア島沖で難破し、シチリア島に上陸しましたが、旅のあいだ、詳細な日記を付けておりました。その日記のおかげで、私たちは王国についていろいろなことを知ることができます。

首都パレルモには多くのイスラム教徒が住んでいて、町中には複数のモスク、郊外には彼ら専用の市場が数多くありました。イブン・ジュバイルは、この町のイスラム教徒住民を次のように説明しています。「この町のムスリムたちは、まだ信仰を守っており、ほとんどのモスクも維持され、アザーンの声が聞こえると礼拝を行っている（アザーンというのは礼拝の呼びかけです）。彼らは町の郊外に居住地を持ち、キリスト教徒から離れて暮らしている。市場は、

ムスリムたちでにぎわい、ムスリムがそこの商人である。フトバが禁止されているため、彼らは金曜礼拝ができない。しかし、祭日だけはアッバース朝カリフの名でフトバを唱え、礼拝することが許されている。彼らには訴訟を申し立てるカーディーがいるし、会衆モスクもある。この祝福された月には、彼らはそこに集まり、ランプの投影の下で礼拝を行い、祝うのである。普通のモスクは数多くあり、数え上げることができないほどである。そのほとんどは塾として使われ、教師がコーランを教えている。しかし、総じて彼らはムスリムの同胞たちから遠く離れ、異教徒の庇護の下で暮らしており、彼らの財産も、妻女たちも子どもたちも安全が保障されていない。」

イブン・ジュバイルはさらにパレルモに住むキリスト教徒たちが、イスラム教徒たちの文化的、風俗的影響を強く受けていたことを示す興味深いエピソードを記しております。「この町のキリスト教徒の女たちは、ムスリム女性のような装いをしている。正しいアラビア語を流暢に話し、マントで身を包み、ベールを付けている。前日のこの祭日には金糸で刺繍したスリッパを履いて出てきた。装飾品を付けて着飾り、ヘナで化粧をし、香水を付け、ムスリムの女性たちと全く同じような装いをして、全員が自分たちの所属する教会というより、巣窟へと練り歩いた」。

さらに、シチリア島西岸にあるトラパニの場合も、住民はイスラム教徒とキリスト教徒からなっており、町にはモスクと教会の両方がありました。イブン・ジュバイルの一行は、断食明けの祭りの日に、このトラパニのモスクの一つで礼拝を行っていますが、イスラム教徒住民たちがハーキムとともに太鼓やラッパを鳴らしながら郊外の礼拝所まで行進していったことを記しています。イブン・ジュバイルは、トラパニのイスラム教徒たちが、このようなイスラムの宗教や慣習を保持していること、そして、キリスト教徒たちがそれを許容していることに驚きの声を上げています。

次に、宮廷の異邦人、異教徒を見ていきたいと思います。パレルモの王宮には、王妃たちがいますが、王妃のすべてが外国人でした。彼女たちは、スペイン、フランス、イングランド出身でした。パレルモの王宮では王を世話するために多くの人々が雇われておりましたが、その大部分はアラブ・イスラム文化の中で育ったアラブ人でした。イブン・ジュバイルによりますと、ウィレルムス二世は、このアラブ人たちを深く信頼して、身辺業務や重要な事柄はすべてを彼らに任せていたといいます。料理長もイスラム教徒であり、イスラム教徒黒人奴隷からなる軍団も抱えておりました。王の側近くに仕える宦官の小姓たち、侍女や女官のほとんどが、やはりイスラム教徒でした。王宮に連れてこられたフランク人女性たちが王宮の侍女たちの影響を受けて、キリスト教からイスラム教へ改宗していたというエピソードも伝えられております。

また、王国の国政を司る宰相のほとんどが異国出身でした。ロゲリウス二世の宰相は、シリアのアンティオキア生まれのギリシャ人ゲオルギオス、ウィレルムス二世未成年期の二人の宰相は、ジェルバ島生まれのアラブ人宦官ペトルスとフランス人ステファヌスです。それから、宰相が置かれていないときには、王国の国政は、王国最高顧問団により運営されていましたが、この王国最高顧問団の中にも多くの異邦人やアラブ文化に属する人々が含まれておりました。

この図で赤く塗ってあるのがアラブ人です。彼らは、隠れムスリム、つまり、公式にはクリスチャンですけれど、密かにイスラム教を信仰する隠れムスリムでした。それから、黄色で塗ってあるのが外国人です。王国最高顧問団の中にも多くの異邦人、アラブ人が含まれておりました。

ところで、シチリア王国の歴代のノルマン王たちは、学問や芸術に関する造詣が深く、医者や占星術師、哲学者、地理学者、数学者などのすぐれた学者たちを王宮に集めておりました。初代の王ロゲリウス二世は数学、政治学に関する幅広い知識と自然科学に対する強い関心を持ち、アラブ人学者やギリシャ人学者と議論するのを楽しみにしていたといいます。また、三代目の王ウィレルムス二世は、医者や占星術師を大切に保護して、王国を通りかかった異国の医者や占星術師には巨額の生活費をあてがって引き止めようとしていたと言われています。ロゲリウス二世が厚遇した著名な学者たちの中には、アラブ人地理学者イドリーシーやギリシャ人神学者ネイロス・ドクソパトレースがいます。

次に、「一二世紀ルネサンスとシチリア」についてお話します。一九二七年にハスキンズというアメリカの中世史家が『一二世紀ルネサンス』という書物を刊行しました。一二世紀の西ヨーロッパが、それまで考えられていたような暗黒時代ではなく、ルネサンスと同じように文化活動が盛んな時代であったことを明らかにした書物です。このハスキンズの『一二世紀ルネサンス』において重要な位置を占めるのがシチリアの翻訳活動です。この地でギリシャ語、アラビア語の哲学書、自然科学書がラテン語に翻訳されヨーロッパにもたらされました。そして、それを消化吸収したヨーロッパが、一二世紀から一三世紀にかけて飛躍的な文化的発展を遂げることになります。このような視点からシチリア王国は、ヨーロッパが東方文化を受け入れる窓口とみなされてきました。そして王国における翻訳活動や、王国を訪れたヨーロッパの知識人たちがとりわけ注目を浴びてまいりました。

このスライドには、プラトンとアリストテレスの書物、それからプトレマイオスの『光学』を挙げていますが、いろんな書物がシチリアでラテン語に翻訳されました。また、シチリアの宮廷はヨーロッパの知識人にとっては、アラビア語、ギリシャ語文献を研究する前線基地の一つでした。ギリシャ語やアラビア語の写本、そのラテン語訳を求めてシチリアを訪れた知識人も数多くいます。このスライドに代表的な人物を挙げております。例えば、一番上のバースのアデラルドゥスは、南イタリアでアラビア語を学び、イスラム世界訪問の足掛かりとしました。その下に挙げているのは有名な中世の知識人たちです。

このように一一世紀から一二世紀にかけて、当時のヨーロッパ世界を代表する知識人の多くが南イタリアを訪れ、そこで得た情報や知識をフランスやイギリスに持ち帰っていきました。そして、一二世紀ルネサンスと呼ばれるヨーロッパの大文化活動を引き起こすわけです。シチリア王国がヨーロッパの東方文化を受け入れる場所であったことに間違いはありません。しかしながら、そのようなヨーロッパにとっての意味だけにこだわる必要もありません。時間枠と空間枠を少し広げてみれば、この現象が複数の文化圏の間で生じる

文化移転の一部であるということが、容易に理解されるはずです。イスラム教徒たちは、かつて古代ギリシャやインドの学問を学び、イスラム世界で飛躍的に発展する哲学や自然科学の礎を築きました。イスラム世界の学術研究の拠点であるバグダッドの知恵の館は、もともとはギリシャ語の文献をアラビア語に翻訳するために、九世紀にアッバース朝カリフによって造られたものです。それから三世紀を経た一二世紀に、今度はイスラム世界の学問がシチリアやスペインを経てヨーロッパ世界にもたらされます。このようにシチリアやスペインにおける翻訳活動、そしてそれによって生じる一二世紀ルネサンスは、イスラム世界からヨーロッパ世界へと学問や芸術が伝わる文化移転の一部としてとらえることもできます。シチリアの異文化接触は旺盛な文化活動を引き起こすと同時に、最初にお見せしたような印象的な遺跡や遺物を残しました。

ヨーロッパの歴史家たちは、王国の異文化併存状態をキリスト教の寛容性の象徴として、しばしば言及してきました。しかし、キリスト教の寛容性が、この異文化併存状態を可能としたのではありません。イブン・ジュバイルは、この島のイスラム教徒たちが改宗の圧力の下で生活していたことを記しております。この島のイスラム教徒たちの指導者の一人、アブー・アルカーシムは、高位の役人としてウィレルムス二世に仕えていました。しかし、北アフリカのムワッヒド朝と内通しているという告発を受け、王の保護を解かれて自宅に監禁されました。その財産は没収され、三万ムーミニーヤ・ディーナールを越す罰金を科されました。彼の場合は、そのような境遇に落とされても、改宗への圧力に屈しませんでしたが、キリスト教に改宗した者たちもおります。例えば、イブン・ズルアというイスラム法学者は、役人に強要されてイスラム信仰から離脱し、キリスト教に入信しました。彼の場合は改宗後、キリスト教徒の法を学び、キリスト教徒とイスラム教徒の両方の裁判を行うようになりました。

イブン・ジュバイルは、この王国のイスラム教徒たちに関する興味深いエピソードを書き記しています。「キリスト教徒の中で暮らすイスラム教徒たちは、妻や子どもを不用意にしかることができなかった。というのも、彼らを厳しくしかると教会に駆け込んで、キリスト教に改宗してしまう恐れがあったからだ。」一度キリスト教徒として洗礼を受けてしまうと、探し出すことができなくなるので、イスラム教徒たちは家族や子どもに対して、非常に気を使って生活していたといいます。

この王国で異文化集団の共存が可能だったのは、この地域に住むキリスト教徒が宗教的、文化的に寛容だったからではありません。強力な王権がイスラム教徒を必要とし、彼らに対する攻撃や排斥を抑制していたからです。実際、戦争や騒乱のときには必ずと言ってよいほど、異文化集団に対する略奪や攻撃が行われております。また、王国のイスラム教徒人口が減少し、王権にとってイスラム教徒が不要になると、イスラム教徒住民に対する態度も冷淡になります。そして、異文化集団によって支えられていた王国の文化的、経済的繁栄も終焉を迎えます。

では、最後に、王国がその後どうなったかを簡単に話しておきたいと思います。一一八九年、三代目の王ウィレルムス二世は三六歳

の若さでその生涯に幕を閉じました。この写真はエボリのペトルスが書いた書物の挿絵です。ここではベッドに横たわるウィレルムス二世の傍らに、ターバンを巻いたアラブ人の医者や占星術師、付き人が描かれております。また、ウィレルムス二世が亡くなったときの様子を描いた別の挿絵では、その死を嘆き悲しむパレルモの人々の中に、ターバンを巻いたアラブ人たちが描かれております。いずれもウィレルムス二世の王宮や首都パレルモにおけるアラブ人の占める位置の大きさを示していると言えます。

　このウィレルムス二世は、王位を託すことのできる息子も兄弟もいないまま没しました。そして、後継者をめぐる政争と王国の混乱が引き起こされます。一一九〇年、レッチェ伯タンクレドゥスがシチリア王に即位しましたが、彼の治世は反乱や戦争が絶えず、王国はまとまりを失っていきます。彼が一一九四年に亡くなると、王国は神聖ローマ皇帝ヘンリクス六世の手に落ちることになりました。多くの歴史家たちは、シチリアの王冠が、この神聖ローマ皇帝の手に移ったときに、ノルマン・シチリア王国の歴史が終わったと考えています。しかし、ノルマン王家の血はここで途絶えたわけではありません。ヘンリクス六世の妻コンスタンティアは、初代のノルマン王ロゲリウス二世の娘であり、そのノルマン王家の血が息子フレデリクス二世へと受け継がれているからです。

　複数の文化の交差点としてのシチリア王国は、このフレデリクス二世の治世半ばで終わりました。それを象徴的に示すのが、一二二〇年代に行われたシチリアのイスラム教徒の強制移住です。フレデリクス二世は北アフリカのイスラム君主たちの援助を受けて、反乱を繰り返すシチリア島のイスラム教徒約二万人を半島部のルチェーラに強制移住させました。王国の特徴であるイスラム教徒とキリスト教徒の併存は、こうして一三世紀初頭に終わり、イスラム教徒の灌漑技術や農業技術が支えていたシチリア島の多様で実り豊かな農業も失われます。地中海交易における中継地としての役割は大幅に低下し、旺盛な商業活動も見られなくなっていきます。フレデリクス二世の宮廷では華やかな学術、文化活動が行われましたが、それは異文化併存という過去の遺産が燃え尽きる前の、最後のきらめきのように見えます。一二五〇年のフレデリクス二世の死は、南イタリアにおいて文化交流が支えた豊かで魅惑に満ちた時代を終わらせる最後の一撃となりました。この後、南イタリアは、華やかな歴史の表舞台から姿を消し、政治的混迷と経済的衰退に特徴づけられる時代を迎えることになります。以上が今日の私のお話です。ご清聴ありがとうございました。（終了）

【参考文献】

イブン・ジュバイル『旅行記』藤本勝次・池田修訳　関西大学出版部一九九二年
高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東京大学出版会一九九三年
H. Takayama, *The Administration of the Norman Kingdom of Sicily*, Leiden/ New York/ Köln, E. J. Brill, 1993
高山博『神秘の中世王国〜ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路』東京大学出版会一九九五年
高山博『中世シチリア王国』講談社現代新書一九九九年
高山博『歴史学　未来へのまなざし〜中世シチリアからグローバル・ヒスト

リーへ』山川出版社二〇〇二年
高山博『文明共存の道を求めて』日本放送出版協会二〇〇三年
高山博『ヨーロッパとイスラーム世界』山川出版社二〇〇七年
高山博『中世シチリア王国の研究〜異文化が交差する地中海世界』東京大学出版会二〇一五年
H. Takayama, *Sicily and the Mediterranean in the Middle Ages*, Abingdon, Routledge, 2019